

## 高良興生院を支えた人

元・高良興生院院長 阿部 亨

### ○森口 智恵野さん（婦長）

かつて畏友・丸山晋先生は、私について「森田療法の純粹培養のような人」と評しましたが、その言葉は森口さんにこそふさわしいと言えるでしょう。

彼女は昭和20年代から、平成7年の閉院まで40年以上、院内の一室に住み込み、私の記憶では短期の休みしかとらず、森田療法一筋に過ごしました。

これはひとえに高良先生への尊敬と、森田療法への心服によるものでした。

私は彼女が晩年に、「高良先生にお仕えし、森田療法にとりくんだことが、私の人生のすべてでした」とくり返し話すのを聞いています。

正月や他の従業員が休暇で留守の時、特に夜間に問題が起こった時、いつも院内にいて連絡してくれました。電話当直で自宅にいた私は、彼女に対応を指示し、安心して任せることができたのです。

無数にあったエピソードのひとつを書きます。ある年の1月2日（携帯電話のない頃です）、私が新宿の映画館で「寅さん映画」を観ていた時、館内放送で呼び出されました。婦長からです。入院者の一人が「退院したい」と騒いでいると言うのです。やむなく私はその人を電話口まで呼び出して、映画館の待合室の大勢の客のいるなかで説得しました。そしてそのあとの説得を更に婦長に頼みました。結局その人は落ち着いてきて問題は落ち着きました。

婦長は時に優しく、時に厳しく、適切に対応するのが常でした。しかし私は彼女が一度だけ、少女のように弱音をまく場面を見ています。

ある時、電話で受診の問い合わせがあり、従業員が対応したのですが、何かのきっかけで突然怒り出し「婦長を出せ」と居丈高になりました。婦長が出て、「何を怒っているのですか」と問いかけたところ、ますます激昂し、「これからそちらに行くから待ってろ」と言い電話を切ったそうです。急いで駆けつけた私に、「先生、ワタシ怖い。怖いわ」と、すがりつかんばかりにうったえたのです。しかし私も怖いのは同様に夜まで入口門を見張っていました。幸いに来ることはありませんでした。

そして私は彼女の別の一面を知った思いで、すっかり親しみを感じたのでした。

### ○丸山 節夫さん（作業指導）

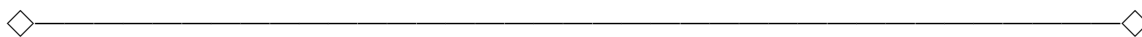
細心緻密、几帳面で、作業指導はその性格通り万全のものでした。地味で、あまり感情をあらわにしないのですが、時に見せる微笑みに何ともいえぬユーモア感がありました。

入院者の生活態度、病状をよく把握しており、私が尋ねると何でも答えてくれる情報通でした。随分参考になりました。しかし決して自分から話すことはなく、そこにも彼の性格が

あらわれていました。

はるか昔ですが、大阪万博の時、従業員、丸山さん、私の三人で見学に行き、奈良のお寺の宿坊に宿泊したことがあります。その時の楽しい道中は今も懐かしい思い出として心に残っています。

紙数が尽きました。亡くなったお二人の思い出は、私にとって貴重な財産であり、もう一度逢いたいなと想うことしきりの昨今です。



## むかはやち いくよし 向谷地 生良先生の講演を拝聴して

NPO法人・生活の発見会 明念 倫子

### 1 当事者研究とは

待ちに待った向谷地生良先生の講演（題目「当事者研究のすすめ方」：保存会主催）が、2017年12月9日に行われた。

そもそも「当事者研究」という取組みは、北海道浦河町にある統合失調症などの精神障害を抱えた人々の地域活動拠点「べてるの家」の活動の中から2001年に誕生したものである。

具体的には、同じ「統合失調症」という世界の内実を経験している者同士が語り合う中から、幻覚や妄想とうまく付き合っていく方法を探っていくという試みである。

「当事者研究」については、私も先生の著書である『安心して絶望できる人生』や、『べてるの家の当事者研究』に目を通していたが、当日は、「当事者研究」の生みの親ともいえる先生のお話を直接拝聴できる願ってもない機会である。一言も聞き漏らすまいと、全身を耳にして聞き入っていた。

当日の私のノートは、心に深くしみ入ってくる「先生の言葉」でたちまち頁が埋まっていった。

- 苦勞を避けない生き方（苦勞志向）
- 〈壁〉が新しい世界の入り口になる
- 〈研究〉という言葉の持つ雰囲気、共通のテーマを生む
- 問題視するのではなく、〈客観視する〉という視点
- 症状にターゲットを当ててではなく、〈生き方〉に焦点を当てる
- 〈その人の経験〉中に可能性がある
- 「不確かさへの耐性」

### 2 森田正馬こそ、当事者研究のパイオニア？

それまで私は、「当事者研究」といえば「べてるの家」とばかり思い込んでいたところ、講演から帰宅後、早速インターネットで「当事者研究」を検索してみると、驚いたことに、いまや「当事者研究時代の到来」とばかり、各分野でその研究が広がりを見せているのではないかと。

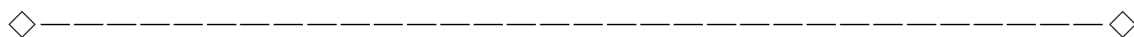
中でも、講演の際お名前が出た熊谷晋一郎氏の当事者研究のアプローチには、「免責」「引責」といった魅力的な言葉が躍っていて、私はすぐに「当事者研究」のとりこになってしまった。

こうしてしばらくの間「当事者研究の文献」に目を通してしていると、こんな考えが頭に過ったのである。

私が強迫神経症で悩んでいた若い頃、勿論まだ「当事者研究」という言葉もなく、自分がそのような研究をしているという自覚すらなかったものの、強迫と闘う日常の中から、「健康時の確認行為と強迫行為となった確認行為とでは、外観は同じ確認行為のように見えても、その内実が〈五感から意識化へ〉と変質し、両者は全く異なる」ということに気づき、何とか回復への手がかりをつかむことができたのだが（拙著『強迫神経症の世界を生きて』）、ひょっとしたらこれも「当事者研究」のはしくれとはいえないだろうか。

そう考えながら森田正馬の著作を見てみると、「思想の矛盾・精神の交互作用・精神の拮抗作用」といった森田療法の核心的理論も、神経質で悩まれた森田先生の貴重な「当事者研究」の成果であり、まさに「森田療法というのは、森田正馬の当事者研究が集大成されたもの」、と思えるようになってきたのである。

森田先生が治療の際に見せたあの迫力こそ、当事者研究でつかんだ「自然科学的世界観」を何としても伝えたい、という思いの表れであったのかもしれない。



## 2017年 秋の心の健康講座のご報告

高良興生院・森田療法関連資料保存会 事務局長 足立 美知子

保存会主催の「秋の心の健康講座」を昨年10月から12月にかけて連続3回シリーズで行いました。

1回目は「大学生・新入社員の適応不安—対人恐怖症（社交不安障害）を中心に—」の題で、市川光洋先生（飯田橋光洋クリニック院長、保存会会長）にお話を伺いました。最近増えてきている若者の会食恐怖症について主にお話していただきました。

先生のお話から——

「会食恐怖症は、神経症の中の社交不安障害の一つである。症状は会食場面で強い緊張と不安があり、のどの閉塞感などの身体症状を伴うこともある。自己の緊張や食事を上手くとれないのを、会食場面で他者に見られていると強く意識することにより、症状はさらに悪化する。以前はほとんど見られなかったこの障害だが、時代の変化に伴い増えてきている。若者は、世の中の変化に多分に影響を受け、仕事や生活の場面で人にどう見られているかに敏感だ。支える人は、若者には世の中がどう見えているのか、まずは若者の視点に立ち、理解することが大切である。」

参加者は、25名でした。

2回目は「認知症と心のケア」の題で、齋藤正彦先生（都立松沢病院院長）にお話を伺いました。ご専門の医師としての視点と、実のお母さまを介護されているご経験と、両面からのお話で、認知症に対する理解がより深まりました。

先生のお話から――

「患者は障害を体験する。認知症を補う環境づくりや働きかけをして、本人の不安やストレスを軽減していくことが大事である。」

「専門職が忘れてはいけないことは、『患者は生きる主体であって介護される客体ではない』ということである。」

「支える家族は、認知症を理解し、まずまずの生活を目指す。」

「私たちは過去から現在の記憶があるから、今一人でいても寂しくないが、認知症になると、今までの様々な記憶が消えていって一人になってしまう。こんな寂しく不安なことはない。」

大変心に残るお話でした。参加者は19名でした。

3回目は「当事者研究のすすめ方」の題で、向谷地生良先生（ソーシャルワーカー、「べてるの家」理事、北海道医療大学教授）にお話を伺いました。

北海道浦河の地で、なぜ精神的な病を抱えている人は地域で暮らしていけないのか、その、先生ご自身の疑問に、試行錯誤しながら地道に取り組んで何十年。何も特別なことをしてきたのではなく、あたりまえのことをしてきただけと先生はおっしゃいます。障害の有る無しにかかわらず、我々一人一人が当事者であり、人生でぶつかる様々な課題にどう対処したら、より良い方に向かっていけるか。当事者研究＝生きる知恵を教えてくださいました。

皆が自分の人生を大切に生きてほしいという先生の思いを受けとり、心が元気になりました。参加者は、72名でした。

講師と参加者との距離が近く、講師の思いを間近で受けとることができるのが、当講座の特徴です。

これからも、心の健康について、皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

---

## ◆ ◆ ◆ お 知 ら せ ◆ ◆ ◆

### 1. 春の心の健康講座

①第一回目 4月11日（水）13：30から、講師；増野肇先生

②第二回目 5月13日（日）13：30から 講師；比嘉千賀先生と岡本重慶先生

### 2. 総会と高良先生の別荘（真鶴町）を訪ねる旅

5月27日（日）JR 真鶴駅 11：30 集合。参加申込みは4月19日まで。

3. 増野先生の『水曜講話』は、偶数月の第二水曜日に変更されました。4月は春の講座のため中止。今までは毎月開催しておりました。詳細はチラシを参照ください。

---

◇編集／発行 高良興生院・森田療法関連資料保存会

◇連絡先 東京都新宿区下落合1-6-21 就労センター「街」内 ☎03-3952-9975  
ただし、火・水・金曜日の10時から17時まで。

◇電子メール [info@hazonkai.net](mailto:info@hazonkai.net)

◇ホームページ <http://www.hazonkai.net/> ※最新の講演情報などをご案内しております。